

魔胎 都市

-幕間-



Radical Dream

R18

成人向け



円城
咲耶

「ついに追い詰めましたよ。此度の事件の元凶……貴方方ですね」

異界化が進み、もはや元の面影など微塵もない都市の一角。生ける腐肉の坩堝と化した街の中心に、彼女は一人、超然と足を踏み入れた。「ギ、ギ、ギギギイッ！」

「罪なき人々を苦しめ、日常を汚す淫魔ども……この円城咲耶、あなた方の暴虐を、決して許しはしません！」

魔界より顕現した、何十、いや何百という数の淫魔の群れ。これまで数えきれないほどの人々の生命を食い散らし、また尊厳を辱め犯し尽くしてきた人間の天敵を前に、しかし、少女は決然と言い放った。

その瞳に輝くは、真剣にも似た鋭い輝き——それは少女が宿す、気高き覚悟と揺るぎなき決意の現れだ。

齡二十にして数多の天魔邪神を葬り去り、汚れきった日ノ本を、それでも無辜なる人々のために守り続ける当代最強の退魔師、円城咲耶。彼女の退魔業には、決して終わりも、僅かの休息さえもないのだ。

「……参ります！」

淫魔ひしめく淫妖なる戦場に響き渡る、凜麗たる声音。それは軍場に響く鬨の声にも似て、気高く勇ましく魂を揺さぶり立てる。

「すう……ふっつ！」

迫り来る大群を前に、少女は優美とも言える所作で、細腕を自らの乳房にあてがった。艶やかに輝くエナメルグラブに包まれた細指が、すつと乳房へと差し入れられる。メートルオーバーにまで熟れ育った巨美乳がぶるるんっ、と豊かに揺れ、その圧倒的な量感を見せつけた。

「ググググ……グゲゲゲゲ……！」

あまりに扇情的なその光景は、淫魔どもの性欲を否応なく煽り立てる。何十、いや何百と集っていた魔物たちは、皆欲望にギラついた瞳で女の肢体を舐めまわし、残酷な期待感に喜悦の声をあげた。

「……女と見れば犯すことしか考えぬ、下劣極まる淫魔ども！ 重ね

重ねたその罪業、死をもって償いなさい！」

そんな魔物どもを、少女は毅然とした瞳でまっすぐに睨みつけた。乳谷に差し込んだ指先が流れるような優雅さで引き抜かれ、その反動でたわわな美乳がもう一度柔らかかに、弾むように揺れ踊る。

淫魔どもでさえ純粹に見惚れてしまうほどの美しすぎる光景だが、少女の手元に握られていたのは、彼らを滅ぼす必滅の神具だった。

「雷迎を伴として参れ！ 顕現せよ、邪鬼魅天魔神霊もろとも総て灰燼と化せ！ 起きなさい、神刀アグネア！」

月影一つ見当たらずぬ夜の闇を、白く染め上げる一筋の稲光。

それこそ、少女が引き抜いた必殺の神剣——古の伝承に伝わる畏るべき神威。億万の炎雷にてあらゆる神敵を討滅したという究極の退魔兵器。インドラの雷とも呼ばれる神刀アグネアの顕現だった。

「覚悟なさい、忌まわしき淫魔ども！ この円城咲耶が振るう神刀アグネア、貴方方の汚れた魂の一欠片とて決して残しません！」

青白い稲光をまとう神剣を手に、美しき剣舞を踊る最強退魔師。一振りのたびに轟々と、龍の咆哮を思わせる雷鳴が鳴り響く。

「はああああ——ッ！」

「ギイ、ギイイイイッ！」

少女の裂帛の気合と、何百もの淫魔の咆哮が激突する。

（負けません……魔を滅ぼし闇を滅し、太平の世を護る。そのためにわたしは、絶対に負けるわけにはいかないのです！）

いかに強大な天魔が相手であろうと、どれほど卑劣な罠が張り巡らされていようと、そして、どれほど淫猥な戦いが待っていようと——

彼女は——もともと気高き魂と、覚悟を持って戦う最強の退魔師、円城咲耶は。

決して、敗北することなどありえないのだ。



「ふうっ……」

熱を帯びた吐息が、艶やかな唇から漏れる。戦いを終えた咲耶は、戦闘の中で乱れた長髪を整えながら、ほっと一息をついた。

(ようやく終わりましたか。流石に……疲労しましたね)

終わってみれば圧勝。そうは見えるが――

強大な神具の召喚と様々な術の行使、そして四方八方から休む間もなく襲い来る淫魔との近接戦――最強の退魔師とはいえ、齡二十の娘なのだ。霊力も体力も、とうに底をついていた。それでも戦いの最中にあつては驚異的な克己力で集中を切らせなかった咲耶だが、ついに戦いも終わり、安堵とともにどっと疲れが押し寄せてきた。

「はあ、はあ、はあ……っふ、う……」

漏れ出す吐息は荒く、呼吸を整えるのにも一苦勞。熱い呼吸を漏らすたび、Kカップオーバーの熟巨乳が苦しげに揺れる。まともに立っていられず、咲耶は中腰の姿勢で一服をとった。

「はあ……ん……」

無防備に突き出されたヒップが、ぶるるんっ、と肉感豊かに踊る。

戦いの最中着崩れ、汗にまみれて繕れてしまった股布が、きゅんっ、と尻割れに食い込んだ。スベスベと心地良い裏生地に尻穴から陰部までを擦り上げられ、そのフェティッシュな触感に、咲耶は思わず甘い声をあげてしまう。食い込みのせいで余計に強調されることとなった豊満すぎる巨尻が、その肉感を見せつけるように震えた。

小さく腰を揺すった刹那、戦いの中で幾度も浴びせられた淫魔共の粘液が、ぬるり、とお尻を伝って足先まで垂れ落ちた。艶々と輝く白のブーツに白濁が絡みつき、妖しくも靈感的な光沢を放つ。

(っ……)。死してなお淫らな淫魔たちの残滓……この感触、この温度、この匂い。いつものことですが、いつまでたつても慣れません……)

全身に浴びせられた粘液は、淫魔共が滅してなお、魅惑のボディに

未練がましく粘りついてた。激しい戦いで紅潮し、じつとりと汗ばんだ芳しい美肌に、滴る粘液がべつとりと汚辱する。むちむちと肉を寄せ合う胸の谷間に、滴る白濁がぬるり、と滑りこんで落ちていく。

「あっ……は。や……ん……」

粘っこくも温かな濁液に、戦いで紅潮した媚肌を直接撫でられる――ひどくいやらしいその感触に、咲耶は思わず甘い息を零してしまう。その度、コスチュームから溢れんばかりに実りきつた巨乳が悶えるように揺れた。窮屈そうに乳肉を寄せ付け合う谷間の中で、滑り込んだ粘液が又チャ又チャと押し潰されて音を立てる。乳圧に押し出された粘濁が、じゅぶっ、といやらしい音を立てて胸谷から逆流した。

「やっ……は。ん。ん……ふ……!!」

ねぼっこいローションを乳の谷間で挟み込み愛撫する、背徳的な感覚に、恥じらいながらも媚びた声を零してしまう咲耶。小さく身じろげば、粘液まみれの尻肉もぶるんっ、と媚びるように震えてしまう。

(っ……い、いけませんね。妖魔たちは滅ぼしたとはいえ、異界化はまだ解けてはいません。淫気の影響が、濃厚です……)

魔界の淫気は、常人にとっては、貞淑な淑女さえ淫乱痴女へと墮してしまふほどに強力な代物だ。さしもの歴戦の退魔師とはいえ、その影響は免れ得ない。

しかも咲耶は、かつて淫魔に敗北した折、徹底的な快樂調教をその身に受けてしまっている。普段は鉄の意志で抑えこんではいるが、破廉恥なまでに熟れ育った豊満な肉体は、その実、どうしようもないほどに淫乱な媚肉として賤けられてしまっているのだ。一度性欲に流されてしまえば最後、泣きたくなるほど性的刺激に脆い肉体は、果てもない肉悦を求め貪婪に疼いてしまう。

「はあ、はあ、はあ……っく。ふう……ん、ん……!!」

(い、いけません……流されては。大丈夫です……こ、この程度。抑



えるのです……我慢しなさい、咲耶……！)

直に淫魔に触れられているわけではない。淫猥な触手に責められているわけではない、野太い肉棒を啜えこまされているわけではない。

ただ、淫気の影響で身体が敏感になっていただけだ。それなのに—— たったそれだけなのに、胸の高鳴りが、肉の疼きが止まらない。

(っ……情けない！ この程度の淫気など……き、気になりません。この程度の快楽など、意識しなければ問題ないのです……！)

ぎゅっと唇を噛み締め、自らに言い聞かせる。涙に潤んだ瞳は、しかし、その気高い輝きをいつそう眩く滾らせていた。

(とにかく、今はいち早く、この場を立ち去るとしましょう)

ここで休んでいても、百害あって一利なしだ。

疼く身体を引きずり、咲耶は一步を踏み出す——が。

「あっ、あ？ きゃああっ!？」

ずるりっ！ 撒き散らされていた粘液に、ブーツの踵を取られてしまう。そんな物にさえ気づけなかったのを、冷静な彼女らしくないと責めるのは酷だろう。なにせ咲耶の肉体と官能は、それほどまでに追い詰められていたのだから。

「つく……う。く……んっ!」

とつさにバランスをとり、無様な尻もちをつかずにはすんだ。だが体勢は整えきれず、膝を折ってその場に倒れてしまう。地面に溜まっていた粘液がビチャッ！ と跳ね返り、ブーツを越えて肉感的な太ももをべつとりと濡らした。さらには跳ねた飛沫は股間に直撃し、きつく食い込みきつた股布越しに疼く牝芯へ染み込んでしまう。

「はあ、あっ……！ く、く……んんっ!」

体液に残留する濃厚な淫気が、下半身を甘く蕩かせる。膝を折ったままグツと唇を噛み締め、咲耶はその淫激を耐え忍んだ。

高潔な精神はその快感に耐え切ったが、恥知らずなことに、豊満す

ぎる巨乳はその衝撃に耐え切れなかった。コスチューム内部に蔓延していた汗と粘液の又メリも手伝って、もともと窮屈すぎた衣服から、両の巨乳がぶるるんっ、と揺れて零れ出す。

「あっ……やっ……!」

誰が見ているというわけでもないのに、裸乳を晒すことに咲耶は顔を赤らめ懊悩した。大人びた麗姿に似合わぬ可愛らしい恥じらいだが、それは彼女の高潔さゆえの反応だ。

露わに晒された巨乳果の、なんとはしたなく淫らな事か——狭隘な締め付けから解放された美巨乳はぶるんぶるんと柔らかかに揺れ踊り、規格外の肉感をこれでもかと思せつける。汗と粘液で蒸れ濡れた乳肌は又ラ又ラと照り光り、紅潮した肌色と相まって恥ずかしくなるほどに淫猥だ。先つちよでピンピンにしこっている乳首の勃起っぷりが、この女が酷い発情状態にある事を隠すことなく示していた。

「つく……う、う……!」

暴き出された淫乳のいやらしさは、まるで、隠していた淫らな本性そのものを見せつけられているようで——咲耶は声を殺し、自らの肉体の淫らさに恥じ入った。

「……本当、情けないですね。でも……」

忸怩たる思いを、しかし咲耶は否定しなかった。キツと臍を引き締め、再び立ち上がって一步を歩み出す。

(これが……今のわたしなのです。受け入れています……そして……)

「負けませんから……。わたしは、絶対に……!」

どれだけその身を汚されても、淫乱極まる肉体に裏切られても。最強の退魔師は決して敗北しない。

円城咲耶の気高き魂が、決して折れることはない——



神守
清華

「ふん！ もうお終いですの？ まったく手応えのない妖魔どもですわね！」

異界に生まれ腐肉の坩堝と化した路地裏の一角。そこは、これまで数多の女性が引きずり込まれ、淫魔の慰み者とされてきた淫虐の狩猟場だ。

だが、その夜に限っては違っていた。

自らこの地に足を踏み入れた一人の少女により、そこは逆に、淫魔たちにとつての墓場と化していたのだ。

「グ、ギ……ギギイ！」

同族を惨殺された怒りというよりは、獲物のはずの少女に反撃され、あまつさえ圧倒されている状況への憎憤だろう。

残された淫魔が唸りとともに牙を剥くが、そんな負け犬の遠吠えなど、彼女にとつてはむしろ心地よいだけだった。

「ふん、吠えるだけしか能のない負け犬が。悔しければかかつてきなさいな？ お仲間と同じような目に遭いたければ、ですけれどね！」

勝ち気に言い放ち、床に横たわる淫魔の死骸を踏み砕く。残酷な、しかし心地良い感触とともに、超鋼質のブーツが敗残者の遺骸を粉砕する。飛散した返り血が、瑠璃に輝く艶やかなスーツを凄惨に彩った。

「それとも、負け犬にはそんな度胸などありませんか？ それはそうですわよね、弱者には集団で襲いかかり、強者には媚びへつらつて尻尾を振る、低俗な淫魔風情が！」

年端もいかない少女の、しかし歴戦の猛者だけが纏う圧倒的な覇気に気圧され、淫魔たちはまるで身動きできなかつた。

そしてその僅かな隙は、命のやり取りを決するには長すぎる時間だ。「はっ！ 隙だらけですわよ、下郎！」

瞬！ 長い黒髪を翻し、少女が疾駆する。肉感的な太ももが見目麗しく躍動し、薄生地越しにくっきりとラインを魅せつける抜群の美乳

がダイナミックに揺れる。

紫水晶のごとくに輝くボディスーツに包まれた肢体が、まるで舞うような優雅さと、閃光のごとき速度で戦場を跳ねる。躍動感溢れるその様は、目を奪われるほどに美しく、息を飲むほどに凄絶だった。

「冥土の土産に御覧なさい！ 神守護神術が奥義、屠龍ノ型！」

剛撃！ その細身からは想像もできないほどに重い拳撃が、魔物の分厚い筋肉を力任せに破碎する。

徒手空拳の格闘戦こそ、神守護身術の真骨頂。

武門の誉れ高き退魔の名門神守流の若き当主、神守清華の剛拳は、並み居る妖魔どもを完全に圧倒していた。

「グギイ、ギ、イイイツ！」

獲物を困むようにしながら、それぞれ触手を伸ばす淫魔たち。だが、怪物どもは、まるで少女に追いつけていなかった。

「はっ！ 遅い遅い、止まって見えますわよ！」

紫電の残像を残しながら、疾風の如き反応速度で淫魔の背後に回りこみ、必殺の拳を叩き込む退魔拳士。それを認識することさえも出来ず、魔物は心臓を撃ちぬかれ粉碎されていた。

「っは！ 身の程を知りなさいな……お前たち雑魚ごときが、この神守清華に触れようなど！ 烏滸がましいにも程がありますわよ！」

尊大に言い放つ少女に、しかし淫魔たちは為す術もない。

若くして武芸を極めた神守流当主にして、なおも力を求め西欧の教会とも手を結んだ異端の退魔師——イバラの姉妹、神守清華。

強くありたい——あの人のように。

純真な思いで紡ぎあげられた純粋なる力で、少女は今日も、戦場を駆けるのだった。



「やれやれ、ですわね……」
スーツに貼りついた返り血を拭いながら、不機嫌そうに、清華は一人悪態をついた。

淫魔の殲滅にはほどなく成功したが、全てが上手く言ったわけではなかった。支配者の死とともに異界化した空間が縮退し、結果、清華は一人、異空間の内部に捕らわれてしまったのだ。

もっとも、すでに淫魔はすべて撃破したし、この空間内に敵性存在は感知できない。ほどなくすれば異界化を維持する魔力も切れ、もとの世界に戻るはずだ。

これまでの経験からいって、さほどの窮地とは思えない。だが、それまではこの不愉快な空間に閉じ込められたままとというのが、煩わしく神経を逆撫するのだ。美しく整った美貌は、不快感で歪んでいた。

だが、それも無理なからぬ事だろう。

もともと内臓じみて変形していた路地裏が、凝縮された密閉空間だ。周囲はひどく狭く、清華一人でも決して広いとはいえない空間密度。その上床も天井も横壁も、すべてがあの内臓めいた肉塊で構成された肉部屋と化していた。

ドクドクと脈を打つ肉塊壁に、周囲を隙間なく包囲されている——生理的ストレスを禁じ得ない状況だが、悪いのはそれだけではない。脈打つ内臓壁からはドロドロとした膿のような白濁が定期的に染み出し、天井からは雨のように滴っているのだ。当然足元には濃厚な白濁が池を作っており、この狭い空間ではどう足掻いても回避はできない。よって清華は、シスターヴェールの天辺から黒髪と美貌までを白濁にまみれさせ、あるいは密着スーツからくつきりと浮き出している乳房やヒップにまで、たっぷりと白濁を浴び続けているのだ。

(まったく……不快な事この上ないですわね……！)
口を開けば、それだけ不快な空気を吸ってしまう。密閉空間のうえ

大量の白濁に満ち満ちた肉部屋内部は、まるで垂熱帯さながらの高湿度だ。淫気を多分に含んだ魔界の湿気は、ねっとりとした肌に吸い付くように蒸し暑い。じつとりと肌から汗が噴き出し、密着スーツの中は蒸れに蒸れてしまっていた。

果実が爛熟し腐敗したような甘い空気には、魔界特有の媚薬効果もあるのだろう。強く吸えば意識がぼやけ、肉体が疼いてしまうのがわかる。清華はできるだけ言葉を発しないようにし、内心で悪態をつくだけに止めた。

(ある程度の時間が経てば、この空間も消滅するはずですわ。ですが、待つているだけというのにも性に合いませんわね)

常に自らの意志と力で道を切り開いてきた歴戦の退魔師。勝ち気な少女に、現状維持という選択はない。それに何より、こんな状況でただ粘濁を浴び続けるなど考えるだけで嫌だった。

ドロドロとスーツに貼りついた濁液を拭い捨てると、清華はとりあえず周囲を探ることにした。

が——

「っ……く!?」

にちゃっ……ねちゃああつ。

一步を踏みだそうとすると、足がまともに上げられなかった。膠のように粘着性の高いゲル塊が、ブーツの靴底にべっとりとはばり付いてしまっていたのだ。

「チッ！ 本当、不愉快ですわね……！」

出鼻をくじかれた苛立ちに、思わず舌打ちしてしまう。何とかそのまま進もうと、左足にありったけの力を込める清華。極薄のスーツにびつちりと包み込まれ、瑞々しい肉感をいっそう強調されている太ももに、ぐつと力がかけられた。

「んっ……ん！」



それでも厄介なことに、左足はまるで接着されてしまったように動かない。ならばと今度は呼吸を整え、下半身全体に力を入れる。

魅惑的なヒップラインをくつきりと浮かび上がらせる臀部にきゅつと力が込められ、密着スーツに皺を刻みながら左右の尻肉がむちむちと互いの桃肉を押し付けあう。紫色の光沢に輝く薄生地にコーティングされた尻肉が撓む様は、見るも艶やかで扇情的だった。

「んう……ん！ よし……これで……！」

ねちゃ、にちゃあああつと真つ白な糸を引きながら、ゲル塊の粘着からようやく左足が解放された。

だが力いっぱい足を引き上げた勢いのあまり、若干体勢が崩れてしまふ。持ち前の運動バランスですぐに持ち直す清華だったが、その衝撃で両の乳房がぶるんつ、と大きく揺れた。

見るからに生意気そうな口ケツト型の巨乳は、密着スーツに覆われながらもその奔放さを遠慮無く見せつけ、まるで剥き出しの裸乳のようにぶるんぶるんと大きく揺れていた。若さ溢れる瑞々しい量感や弾力は、ぴつちりと吸い付いたスーツ越しでも十分に伝わるほどだ。むしろ白濁に濡れて紫水晶のように輝く薄生地の光沢が加わり。余計にフェティッシュな魅力がいや増していた。

「っ……ん、ああっ!？」

一難去ってまた一難。

そんな蠱惑的な豊乳に、今度は天井からドロリ……と濃厚な液塊が落下してきた。

先ほどの衝撃ので、部屋にも振動が伝わっていたのだろう。天井に溜まっていた粘液が、大量に垂れ滴ってしまったのだ。

「つく……ん……んっ!」

ねとお……どろ、にちゃああつ。

落下してきた白濁はひどく粘りが強く、そして濃厚だった。液体と

いうよりも、もはやアメーバ状の粘塊と呼んだほうが相応しいだろう。あまりの濃度に色は不透明で、とどこころダマになって凝固してしまっている。薄いスーツ越しに、そのおぞましい質感がねっとり伝わってきた。

「ツチ！ 本当……ろくでもありませんわね……！」

苛立ちもあらわに、清華は胸にへばり付いた粘塊を引き剥がそうとした。黒紫のグラブに包まれた細指が、力任せに粘濁をひっ掴む。

「……んっ!」

ぬちゃ……につちゃあああ……!

腐汁を詰め込んだ肉袋が潰れるような、気持ち悪すぎる感触が掌に伝わり——事実、ぶぢゃあああつと音を立てて粘塊は潰れ、内部から大量の濁液が溢れ出してきた。ひどく濃厚な粘液は細指の一本一本にまで絡みつき、指の隙間にまで広がってしまう。さらには形を崩した粘塊はドロドロと液状に蕩け、糸を引きながら乳峰を滑落していった。美しい紫のスーツは、ねっとりした白濁色に醜く汚されコーティングされていく。

乳房に感じる汚辱感はいっそう強くなり、ドロドロとアメーバが流動する感触がスーツ越しに伝わりなんともおぞましい。

(……っ！ 何から何まで……本当、不快ですわ……!)

粘塊を乳房から引き剥がすどころか、むしろ被害を広げてしまった。徒労感よりも、清華には憤りのほうが大きかった。

すぐさまこんな茶番は終わりにしよう、今もドロドロと蠢き続ける粘塊に再び手を伸ばすが——

「く……んっ! こ、この……ん、ああっ!」

ぬる……にちゃ、ねちゃ、にちゃっ。

潰れて液化してしまった白濁液はひどく掴みにくく、いくら足掻いても掌から滑ってしまい捕らえることが出来ずに。そのくせ濃度や粘

りはそのままの強さで、べちゃべちゃと掌にへばりつき、なぞった乳峰にもそのまま広がっていつてしまうのだ。

結果清華は、粘濁を引き剥がすどころか、自らの手でまたしても自身の胸に塗り広げてしまう事となっていた。

「ッ……。くっくっッッ！」

一度ならず二度までも、自らの行為で余計に事態を悪化させてしまった。どうしようもない怒りをぶつける場所すらも見当たらず、さりとてこのまま放置するわけにも行かない。

塗り広げられた粘濁は巨乳全体にねっとりりと粘りつき、スーッ越しに感じる温度や感触のおぞましさときたら、まるで生暖いヨダレまみれの舌で舐めしゃぶられているかのようなのだ。

「くっく……んっ！」

なんとかが少しずつでも引き剥がそうと、懸命に左手を蠢かせるも、やはり粘濁はねっとりりと糸を引くだけでまるで剥がれない、むしろ、指の間にもぬるぬるした感覚が浸透してしまい、だんだんと精密な動作ができなくなってしまうようだ。グラブ越しに指同士がぬるっ、ぬるっ、と滑る感触が、なんともおぞましくも淫猥だった。

「ッ……や、やれやれですわ。本当……もう……！」

敵は全て倒した、この空間にも大して害はない。

それはそうだが……そうなのだが……。

「ああ、もうっ！」

怒りのやり場も、粘液まみれの手のやり場もない。

この密閉空間から清華が開放されるのは、実に数時間も後の事だった。

今回ついに直接的なエロが無い物を作ってしまった。趣味丸出しのヒロインがヌルヌルになるだけという……後コスチュームとプロポーションの描写を重点的に黒井さんをお願いしました。とても妄想を掻き立てられます。完全に俺得です。

本当にありがとうございました（ ^ω^ ）

後、汁で見えなくなった尻置いておきます。



■奥付■

魔胎都市 幕間

2013年 12月31日 初版発行

○発行

Radical Dream

HP URL <http://www.rindou.sakura.ne.jp/>

E-mail rindou@rindou.sakura.ne.jp

○著者

絵：竜胆

文：黒井弘騎

○印刷会社

株式会社サングループ



SUN GROUP

<http://www.sungroup.co.jp/>

- 18歳未満の購入、閲覧を禁止いたします。
- 無断複製、転載及び公開を禁じます。

